

AMEPHONE presents

# AYA COLLETTE & THE SETOUCHI AUTHENTICS

## THE CLASSICAL ALBUM OF COLLETTE

1 宣言

1 宣言 : 詞 Langston Hughes 曲 Aya Collette

vocal : AYA COLLETTE  
guitar, 7 strings guitar, caquinho : torahiko yukawa  
surdido, pandeiro, cowbell, etc. : yasushi akaza  
key : shinichi tsukamoto  
trumpet : BUCCI

2 唄 : 詞 Jacques Prevert 曲 Aya Collette

piano, vocal : AYA COLLETTE  
guitar, e-guitar : torahiko yukawa  
trumpet : BUCCI  
contrabass, cello : takuyuki moriya  
sln : kazuhiroriuchi

3 空 : 詞 金子光晴 曲 Aya Collette

piano, vocal : AYA COLLETTE  
conga, cowbell, etc. : yasushi akaza  
claves : hitoshi akaza  
contrabass : takuyuki moriya

4 明るい部屋 : 詞 狩野泉 曲 Serge Gainsbourg

piano, vocal : AYA COLLETTE  
e-guitar : torahiko yukawa  
contrabass : takuyuki moriya  
surdido, conga, etc. : yasushi akaza  
trumpet : BUCCI  
strings arrangement & operat : masanori yanagawa

5 陽はまた昇る : 曲 Aya Collette

piano : AYA COLLETTE  
contrabass : takuyuki moriya

6 アリとセミ : 詞 La Fontaine, Jean-Luc Godard 曲 Aya Collette

poet reader : tomyukinishino  
vocal : AYA COLLETTE  
conga, cowbell, timbales, shaker, etc. : yasushi akaza  
e-guitar : torahiko yukawa  
key solo : shinichi tsukamoto  
flute : nami ko suzuki  
contrabass : takuyuki moriya  
key : masanori yanagawa

and special guests on chorus  
The Three Legends of SUGINAMI : tomyukitakahashi

7 パイプ : 詞 Charles Baudelaire 曲 Aya Collette

piano, vocal : AYA COLLETTE  
contrabass : takuyuki moriya  
horn : akemi miyahara  
bass clarinet : masahiko okura  
flute : nami ko suzuki  
conga, agogo, etc. : yasushi akaza  
e-guitar : torahiko yukawa  
bottle : masanori yanagawa

8 PAINLESSLY : 詞 狩野泉 曲 Keith Jarrett

vocal : AYA COLLETTE  
drums : yasushi akaza  
piano : shinichi tsukamoto  
e-guitar : torahiko yukawa  
e-bass : takuyuki moriya  
soprano sax : miyo fukushima  
trombone : toshihiro koike  
horn : akemi miyahara  
flute : nami ko suzuki  
strings arrangement & operat : masanori yanagawa

2 唄

3 空

4 明るい部屋

5 陽はまた昇る

6 アリとセミ

7 パイプ

8 PAINLESSLY

はじめに

本アルバムでは、鬼オアヤコレットの歌世界を、プロデューサーAMEPHONEにより組まれた新バンド、セトウチ・オーセンティクスとの伴奏でお聞かせいたします。ピアノ弾き語りでおなじみ、アヤコレット女史の時にクラシカルで寓話的な名曲の数々を、オーセンティクスがそのラテンチックなテイストをもってカラフルにアレンジ。摩訶不思議な女史の魅力が、ポップに際立つ、まさに迷盤(！)に仕上がりました。AMEPHONE 独特のミキシングテクニックも全開！そのザラついた、奥行きを感じさせるサウンドは、唯一無二の音響作品としても楽しめます。

東京のインディーポップシーンで、今年度最後の話題を独占すること請け合い。"AMEPHONE presents アヤコレット&ザ・セトウチ・オーセンティクス"を是非お楽しみください。

アヤコレットの歌について

現在の彼女は、ツキノワのベーシストでもある守屋宅之、同じくツキノワでエレクトロニクスを担当する庄司ヒロミツとのトリオ編成に毎回豪華ゲストを向かえて、盛んにライブを展開している。いまや、東京のオルタナティブな音楽シーンでは伝説のシンガー、ピアニストとなった。AMEPHONE とは十年來の盟友。彼の作品のほとんどでヴォーカルをとっている。

彼女の表現でユニークなのは、歌詞とメロディーの関係。まず歌詞の選択が面白い。例えば、ゴダールやリヴェットの映画からシナリオをそのままいただき、なんていう曲もある。それから仏滞在が長かったせいか、当地の偉大な詩人達の作品からも多く引いている。ヴォードレール、クロードル、プレヴェール...音を付けるには手ごわい相手ばかり。だから自然とその詩を歌うメロディーも、独特の起伏を持つものになる。クラシックの歌曲のようであったり、ポエトリーリーディング風だったり、いつ聴いても新鮮で、ちょっとだまされたような、森の中で道に迷うような感覚が味わえる。それでいてエレガントで、人懐こいところもある。童話やファンタジーの世界に通じているのかもしれない。

オーセンティクスのラテンテイストについて

ヤーコの曲をアレンジしてアルバムを作ろう、という話になって、最初はジョーピン/オーガマンの路線を考えた。黒いサンバのリズムにヨーロッパの洗練されたオーケストレーションの組み合わせ。それからボサノバのヴォーカルスタイルはトースティング風の彼女の歌に形が似ているということ。両者はテイストの上では全然違うから、むしろ引き寄せたら面白いはずだと直感した(「宣言」「唄」「明るい部屋」)。

それで作業を進めていくうちに、だんだんリズムの方に指向が移って行って、だったら前から挑戦したかったルンバをやってみようということになった。3-2のクラベスに合う歌を探したら、彼女の「空」という曲が出てきた。詩は金子光晴。パーカッションとピアノがアフロ色を全力で打ち出した後、金子の「石の上に休むシオカラトンボ」という一行が歌われるんだけど、これには感激しました。ミスマッチの極みというか、異質なものが触れ合ってすごい力のある表現を生んでいる。これで勢いづきました。

「アリとセミ」では、ラ・フォンテーヌの昆虫の世界と、これを見事に人間世界に対応させて描いた、ゴダールの「右側に気をつける」の一場面をコラージュして使っている。音楽的には、チャ・チャ・チャ タンボレーロ(パナマのリズム) キューバ風のデスカルガという流れが、虫 人 虫という視点の変化に対応している。言葉にするとわかりにくいけど、実際に聴いてもらえれば寓話的なコメディとしてストレートに楽しんでもらえると思う。

「パイプ」。ボードレールの詩。「私は作家のパイプです、アフリカ生まれの美人のような」という最初の一行でノックアウト。スヴニールのアフリカン・エキゾチスムを歌うことで、逆にヨーロッパという視点の中心が強調されている。同時に、楽観視できない呪術的な雰囲気かじり出していて、これから何か恐ろしいことが起こる予感が...ここにもアフリカ ヨーロッパの往復運動があります。パーカッシブなピアノ、不協和音を作るホーンセクション。6/8拍子を刻む金属打楽器とベースのアンサンブル。最後、Fで八モルホーンズの上に、マンリケ〔西アフリカの一部族〕風の、弦によるスケールをダビングしてもらったところ、得体のしれないコードが生まれてしまったのでした。

キース・ジャレットの美しいバラード「マイ ソング」に、愛の詩を付け歌われるのが、アヤ女史のオハコ「ペインレスリー」です。アルバム最後を締めくくるこの曲では、エレキベースとドラムスがリズムの基礎を作り、三連で刻むピアノ、ジャジーなギターがシンコペートしながら絡む、いわゆる R&B タッチの編曲。ここに、オーガマン風〔不協和音の部分的な採用〕にアレンジされた、ストリングスとホーンセクションが乗ると。定番ですが、このアルバムの中で聴くと、この曲だけ少し浮いている。それゆえ挑発的にも聞こえる。アルバム全体を一色で塗りこめてしまわないように、音楽がよりポジティブに展開していけるようにとの狙いを込めています。

オーセンティック〔正統的〕に振る舞えば振る舞うほど、歌が本来持っている、矛盾や非合理的な面が少しずつ滲み出てくる。何かおかしいなと思いつつ、しかしそれらの歌をすんなり聴けてしまう。

これが我々が日々実現したいと思っているアイデアです。今回はたまたまラテンということでしたが...

## ミキシングテクについて

オーディオというものを、古典的な "ヴァーチャルリアリティー" を提供するための装置として考えています。どのような録音物をもってよりリアルな音響表現とするかは、議論の別れるところかもしれません。私事で恐縮ですが、個人の具体的体験からすればそれは文句無く、SP レコードの特性である、と断言し得ます。それも出来れば電気をいっさい使わない、機械式蓄音機による再生であることが望ましい。

その根拠を、より普遍的なものとして展開させるだけの余裕はここにはありませんので、ここでは、上にあげた見解を反映させるために、我々がいかにして作業を進めているかということをお話させていただきたいと思います。

御多分に漏れずハードディスクを使つての作業ということになるのですが、録音された音に対して、極端に位相が変化してしまうような EQ はあてない、ということがまず一点あります。特に上下両極にある帯域に関してはカットすることもしばしばであります。好みの音色よりクリアな音色。これがミックスにおける基本的な考え方。では、音色の設計はどの時点でなされるのかということ、それはもちろん録りの段階、アコースティック〔音響〕への配慮とマイキングによって決められます。とはいえ、そう鳴って欲しい音が奏者から発せられていなければこちらも努力のしようがありませんので、事前の打ち合わせが大事であると。打ち合わせとは何か、これは個人対個人の恣意的な議論の様なものでありうるはずはございませんで、音楽の場での確認ですから、結局リハーサルを徹底するということになります。ここでは一つの音楽を維持するために各奏者が時間軸上のそれぞれの時点でどのように振る舞うのが適切であるかを詰めていく作業がなされるわけですが、ここに必要な音色が出さろうわけです。それらは、楽理にのっとった〔あるいはそこから逸脱しようとする〕奏者の身振りの正確な反映です。

これが作業のおおよその過程ということになりますが、話があまりにも当たり前のことに終始しており、SP レコード云々を絡めた特徴的な議論がいつの間にか姿を消してしまっているのではないかという御不満を受けるやもしれません。事実御指摘に預かるような形で論は推移してしまいました。

極めてノーマル、ということなのかもしれません。

the authentics are

shinichi tsukamoto : piano, keys  
torahiko yukawa : guitar  
takuyuki moriya : e-bass, contrabass  
yasushi akaza : percussions, drums  
tomoyuki takahashi : chorus  
and

AYA COLLETTE : vocal, piano

\*all songs arranged by AMEPHONE

except truck1 arranged by AMEPHONE, SHINICHI TSUKAMOTO and TORAHIKO YUKAWA

\*recorded & mixed by AMEPHONE

s i m p o h @ j c o m . h o m e . n e . j p